

時

渡辺平内治著

269
37

011076-000-6

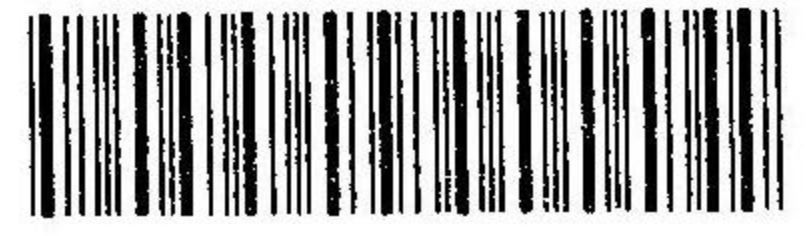
特49-144

時

渡辺 平内治/述

M45

AAE-2659



渡邊翁時に關する講話をして時人を感憤せしめたる

こと、一再ならず、今請ふて文にされたるものを見るに

尙懦夫を起たしむるものあり。之を讀み、之を讀まし

特49 144 むるは、正に修養に志あるもの、之に感じ、之に悟りて起

つものは、それ有爲の人たるべし。吾等は既に之を讀

み、更に感動したるものなり、今天下の同志諸君は愚

未知の人にも敢て薦めざるを得ざるなり。一言

して、以て序となす。

三河安城寓居

十二月十三日

我農生 山崎延吉

附 2. 45. 内交

時

時といふことに就いて、御咄しいたします。抑々時といふものは、如何なるものかといふに、一日一晝夜廿四時にして、之を三分し八時間となる。その間に於て、八時間働かば八時間休み、八時間寝るとする。かうすれば仕事は相當出来るものであります。しかも中々仕事といふものは出来ませぬ。農家などで、いくらも仕事をせぬ、よく調べると、三百六十五日の一年を二分し、半分を遊び、半分働くとし、夫婦二人で耕作すると九反の田地を作ることが出来る。尤も仕事には忙しき時と忙しくない時とあつて、取越して出来るものではないが、勘定ではさうなるのであります。この事を知ると、仕事は廻らねばならぬ筈だが、中々廻らぬ、或格言にも「時は金なり。金は權なり」とあります。之は時を尊く思つて働けば、時から金が生じ、金が人間一生涯の權利となるといふことで、時を無益に費さぬによるのであります。又或格言には「人間の價は勢力の分量なり」

二
どうである。たとへば文明の利器たる汽車について考へますのに、その始め軌道を敷くのに、土地一坪五圓にて買上げたるものを、土方が數取りして働く段には、一荷いくらというて數だけしか賃錢が貰へませぬ。かくの如く金を儲けるのは、勢力の分量でありまして、隨て時の尊いことを知らねばなりません。

近頃時間の勵行といふことを、八釜敷く申しますが、之は戌申詔書の始めに「人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚り彼此相濟シ以テ其福利ヲ共ニス」ども「日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセントスル」ども仰せられてあります。時間の尊きことを知らねば、之に伴ふことが出来ませぬ。世間で時間勵行といふことを、何時、如何なるときにいふかといふに、集會などに先きに來たものが、待遠いあまりにいふので、自分の遅いときはいはず、全体この者等は、時間の尊いことを知つていふのかといへば、さうではない。待遠かつたからとか、自由を妨げられたとかでいふので、共に同じ程度の者が、自分の都合からいふのであつて、こんなことではとても、日進月歩の世に伴はれませぬ。今日

では汽車既に遅し、電信あり、無線電信あり、飛行機のある世の中である、今迄の考では、この進む世にふぐい落されて仕舞ふ。これ一方からいへば、日本の習慣として、財産家の息子など、おごつて遊ぶといふ習慣がありました。それが爲に、今日の營業とか今日一日の尊いことを忘れて居ます。思はぬのではないが、習ひ性となり、一ツの塊となり、心には思つても、改善が出来ませぬ。たとへば、刃物の切れざるは、研がぬからである。皆さんの知つて居る。皇后陛下の金剛石の御歌によつて知れます。即ち磨けば始めて光る。人が見て賞美するまで、研がねばならぬ。時間の尊きことを知る心がなから、時間の勵行が出来ぬのであります。

吾々の長き時を生きて居るについて、忘れてならぬのは、彼二宮先生の天地の神と君との恵にて世をやすらふる徳に報へやと仰せられた様に、神の御徳や、君の御恵を忘れてはならぬ。また報徳教の結社の要旨に「天地の化育を賛成し、神徳皇德國恩に報ふぞ社員を務なる」とあります。之は吾々

が今日生きて居る、呼吸も食物も皆天地の化育によつて、かく安穩にすんで居るのであります。お耻しいことながら、今日私の家で、兩戸の板がはなれ、釘がゆるんで居ました。斯様になつて居りましても、國家の法律規則がありまして、臣民を保護する道が立つて居ますから、吾々は安氣して居られます。吾々の衣食住は皆天地の神の賜物であります、故に天地の化育の化と申すのは、化すといふ意味ではない、教へといふことで、即ち教へ育つるであります。其お陰に報いるのが報徳の元であります。化育といふことを解きますれば、時の尊いことも分ります。天地の化育といふことは、天理とは如何なることかといふことを話せば、直に分ります。即ち

動は陽なり。動、極まれば靜なるに返る。靜は陰なり。靜なるの極は復動く。此動陽靜陰、一たび動、一たび靜にして、互に其根となりて、陰は靜なるより生じ、陽は動くより生ず。陰陽分れて兩儀となる。天は陽で地は陰であります。晝は陽なれば夜は陰で、何物でもこの陰陽二つになります。天の働きは動いて陽、地の働きは靜かにして陰であ

ります。男は陽女は陰なれば、男は活動し女は靜かにするのが其の性にかなふのであります。動いて其極に達すれば靜となる、即ち大風も凪げば靜かになる。動と靜と二つの者が互に根となり、陰は靜かにして生じ、陽は動いて生じます、陰陽分るれば二となり二つのもの合すれば中和を致し、萬物養はれます。又之を乾坤とも申します。

乾道成レ男、坤道成レ女。二氣交感化ニ生萬物。萬物生々而變化無レ窮。

〔釋〕乾道、男を成し坤道、女をなす、二氣交感して萬物を化生す、萬物生々して變化窮り無し。

乾道は即ち陽、坤道は即ち陰であります。この陰陽の二氣が交り感じて、萬物を化生します。人間も此間に住むのであります。陽は乾即ち天より出で、陰は坤即ち地による。天地陰陽の二氣あつて萬物を生じ、萬物生々して變動化育すること、窮まり盡くることがありませぬ。

乾天也。天者乾之形体。乾者天之性情。乾健也。健而無レ息之謂レ乾。

〔釋〕乾は天なり、天は乾の形体、乾者天之性情、乾は健なり、健にして息む無き、之を乾と謂ふ。

易の乾の卦の傳に、乾は天を象りたる卦の名なり。即ち天といふ者は乾の形体にして乾の卦は天の性情を云ふ者なり。乾とは健やかなるなり。健かにして常に動きて息むことなきを之を乾の性情といふなり。

戊申の御詔書にある、自彊息まざるべしと仰せられたのも、此乾の卦の「天行健。君子以自彊不息」より出たるものと拜察するのであります。

二宮先生の歌に
聲もなく香もなく常に天地に書かざる經をくりかへしつゝ

とあるも此の意味を讀まれたのであります。先生は安政三年に死なれましたが、天地の働きの日輪が朝出でて晩に這入るのも、丁度大般若經をくる様に働く。之が御詔書の自彊息まらずといふに當ります。二宮先生は夙く之を讀まれました。即ち天を形どり、天を

賛美して讀まれました。吾々もこの天の働の活々たるが如く、自らつとめて働かねばなりません。いかに之を讀みましても、唱へましても、之が實際に行はれぬのは、つまり天地の働き、乾坤の道理を心得ぬのによります。よしや心得ても實際出来ぬ。これそれほど思はぬでも、今日のすぎわひが出来るといへば安氣な譯であります。併しながら、人文日に就り月に進む世の中に、文明の悪澤を共にせんとするには、是迄通りにては、兎ても附いていけぬ。故に人々の意志を鞏固にすることが必要であります。人間は何か動機に逢へば、促されずとも出来るもので、寢て居ても地震があれば飛び起るが、たゞでは中々起きられぬ。人間は何でも辱められるとか、貧乏にでもならねば中々改まらぬ。余程意志が強固でないで、出来ぬものであります。

婦人は嫁入りして、良き夫を得、良き子を得ねばならぬ。之が第一の望でなければならぬ。而して先方ではまた善き嫁を得んと選ぶのであります。されば意志健かに、よく働

き、坤の徳を備へてすなほに、しかも事に當ては勇氣がなくてはなりません。常に意志

を強固にせんと心がけ、之を平生の着眼点とせねばならぬ。必要欠くべからざるものと氣を付けねばならぬ。

孔子も「義を見て爲ざるは勇なきなり」と之をなさねばならぬと知つたなら必ず之をなし、してならぬことはキツトせぬといふのが、即ち意志の強固なのであります。「昨日と同じ今日なし、去年と同じ今年なし」といふ格言がある通り、今日過ぎし日は又とありませぬ。同時に今は如何にムスコ、ムスメにて花の盛りとはいへ、愚頭々々して怠る間も、天地の行動は待つて居りませぬ。大きく見て、天地の相續を得る種親として耻かしくあります。もしも意志を強くいたしますれば、朝起きでも、家の取締りでも、何でも出来ます。すべての事におちけぬ様になります。今の中にその仕度をするのであります。學問技藝を修業する外に、意志健全に働くといふことが大切であります。恥を忍ぶことは、勇氣があるのによります。それが見事出来て、自由なる意志となり、爲すべきを爲し、爲してならぬことをせぬ、此の如くして規律正しくなり、秩序が立つ様になります。

此の如く一番の元を考へねばならぬ。天地の働きが吾々に幸福を興ふるといふことに基き、其の心持でいたしまして、人に促されてする様ではいかぬ。自身大綱を握りてなすべく、糟粕をなめてはならぬ。豫定して進行し、人と約束したことは必ず違へぬといふ様にすれば、自から時間の勵行が出来ます。寶飯郡牛久保町の某といふ人は、どんな集會にも時間を違へたことがない、この一事から推して其家の掃除が、取り乱してあらうとは見えませぬ。私は此頃尾張の清洲といふ所の處女會に於て、二時間ばかり講話を致しました。講話がすんで六十人許の處女の内、五人の者が如何にも熱心に聞いて居たのに感心して、之を役員の人に話しますと、アレが分りましたか、アレは土地で有名の者だと申しました。自から眼にうつつて分ります。こゝを考へねばならぬ。見手が見ると分るのであります。自から彼是辨解する様では駄目であります。

誰が見てもわるうないのが善いとなり、己がよいのはよいのではない。畢竟時の尊きことを、辨へて居ると居らぬとによります。辨へて居るやうになれば、勵

行なごせぬでも、するのが面白くなります。今の世は、皆緩慢なる者ばかり集つて居る。故に他を見て一惣感心はしても、自らは出来ませぬ、たまたま時間の勵行など言ひ出しても、衆寡敵せずして行はれませぬ。他人はともあれ、自ら爲すべきを爲すと、多人数の眼に映ります。皆が皆がと云ふものは、一時は行つても、矢張元のものに戻つて仕舞ひます。

時につきては色々調べて見ました。和訓栞に『時は時辰を云ふ。常の義なり』とあり日本紀には期をときとよみ、諱訓抄に代もときとよましてあります。文選には『時來亮急絃』と見えます。逍遙院殿の歌には『何事も時ぞとおもへ、夏きては、錦にまさる麻のさころも』とあり。孔子も『時に中ず』と申されました。時は時辰をいふ、常の義なりとは、絶間なく行動するをいふので、時が十二と十二と合さつて一晝夜をなし月をなし、月が十二集つて一年となり、四つに分れて四時といふ。即ち春夏秋冬にて、それが常に運轉して止みませぬ。而して天地の働きは三百六十五回廻れば、元の處に來

る、之によつて曆が出来、四時が出来るのであります。期は時期の期で學校などでは學期などいひます。時代年代などいふも同じく時の變名で大と小と異なるのみであります。又時は疾の義にて、早く過ぎ行くを云ふのであります。かく斷じて居る間も、時はどく過ぎ行くのであります。逍遙院殿の歌は、四季にたとへて身分相應の分度を忘るゝなどの戒めでありませう、又蜀山人の歌には、

春からに夏秋冬のこをせは時にあはねど時にあふもの。

春くれば夏さるものをこしらへて今日一日もあだにくらすな。

ともいはれました。澤庵和尚は稻葉侯が春は退屈なものだといはるゝに答へて、

あさましや思へは日日の分れかな、きのふの今日に又もあはねば。

思へば今日の日に毎日々々別れ居るのであります。それを今日の一日を退屈するなどは

浅ましいことであります。淮南子には『寸陰尺璧』とあります。寸陰とは一寸の間、尺

璧は尺もある玉で、人生は老少不定いつ死ぬとも知れぬ故に、一寸の月日も惜むべしと

云ふことであります。古歌にも

古のふみにも見ゆす今日の日の再ひかへるためしありとは。

ともあります。御互に氣を付けねばならぬことであります。

太田錦城先生は『人の一代は一年の四季の如し』といはれました。之を私は時代本位と

申します。即ち人間が幼より成長して、二十までが春に當ります。此間に女なれば裁縫

炊事等を學び、一人前となり嫁人する迄になり、男は兵役を務め、獨立して一家を經營

する迄になる。時候で云へば花咲き芽をふく時であつて之を浮性といふ。かくの如きは

始終つゞくものでない、裕から單衣に移る様に、廿一から四十までが夏に當り、女は嫁

入りして子を生子、男は積極的の一家を經營し、身上をふやし、小供もふる、進んでは

國家の爲にも尽す。恰も物が熱に遇うて膨脹する様であります。之を熱性といふ。次

は四十一から六十まで、秋に當るので之を鬱性といひ。萬木の葉が黄ばみ紅葉して散る

如く、人間も消極的となり、監督の位置に立ち、舊物を固守する様になり、秋の様とな

ります、六十一より末は、冬の季となり、物の働きつかず、最早此世の事はなし終へた

のであります。之を冷性といたします。人は何でも春の浮性の時に、教育を受け、意志

をねつて強固にし、物事を知る爲に、人の咄しをも聴き、書物をも讀むべしであります。

天地の間に於て四時行はれ萬物生ず。即ち草木に於て、梅桃櫻の如きは春花を開き、藤

は春夏の間に、菖蒲は夏、菊は秋、水仙は冬に花を咲きます。吾々人間も其氣に養はれ

各受けし性があります。人間は冬枯になつては仕方がありません。されば一年の四季は

自分一代の様なものであります。此間に於て時を重んじ、年中行事を拵へて、規律順序

を立て、春の仕事、夏の仕事といふ様に、其間に爲すべき事を爲さねばなりません。

女の仕事としては裁縫洗濯等、時候に合ふ仕事があります、之を遺憾なくするには、年

中行事を拵へ置けば、意志が健全であれば、屹度行はれますと思ひます。

次に皇后陛下の御歌並に古人のいひ置かれし、時の事につきて説きませう。先づ

皇后陛下の御歌

金剛石もみがかずば 玉の光りは添はざらん

人も學びて後にこそ 誠の徳はあらはるれ

時計の針のたえ間なく めぐるが如く時の間の

日かげ惜しみてはげみなば いかなるわざかならざらん

といふ御歌をよくよみ、身に應用することが出来れば宜しい。この御歌をよくよく考ふれば時の尊きことが分る。此處に早く氣が付さ、應用するものは、必ずよき人となることが出来来る。ドーカこの御歌を守本尊となし理想として、之に御答へ申す人となつて貰ひたい。

次には室直清、鳩巢と號す、江戸の人でありましたが、青年に學問を勸むる文章、即ち勸學文と云ふのに、次の様に云つてあります。

諸君の如きは春秋に富み、材力に足る。もし懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき、然れども歲月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず。只孜孜汲々

して勉めて息まざるにありぬべし。若し悠々として日を涉り、一旦年老い齡傾きて後日頃の懈りを思ひ出で、いかに悔ゆとも何か益あるべき。即ち今翁が身の上にて候。と皆さんの如きは、春秋に富みとてまだ若いから、怠らず修養したならば、どうして古人に及ばぬことのあるぞ。こゝが御詔書の『自強息まざるべし』であります。又そのつゞきに

されば古詩にも『少壯不努力、老大徒傷悲』(少壯努力せずんば、老大徒に傷悲せん)といひ。陶淵明も『盛年不重來』(一日難ニ再晨)及レ時當ニ勉勵ニ歲月不待レ人

〔盛年重ねて來らず、一日再晨なり難し、時に及びて當に勉勵すべし、歲月は人を待たず〕是等の詩句時々吟咏して、勇進の志を振起すべし。

とあります。即ち若い時分に骨を折らねば、年老いてから徒に悲しむ様になるといふ、古い詩であります。又陶淵明の詩は、人生春の花盛りの様な時は、二度と來ぬ。過ぎ去つた朝は又と來ぬ。さればこの時即ち若い時をばづさず、勉め勵むべし。昨日と同じ今

日なし、去年と同じ今年なく、年月は人を待つて居ませぬといふことであります。事を爲すには、之等の詩句をよみて勉強修養をなし、向上發展すべしと申すのであります。又唐の朱文公勸學文に

勿レ謂今日不レ學而有ニ來日。勿レ謂今年不レ學有ニ來年。日月逝矣歲不ニ我延。嗚呼老矣是誰之愆。

〔釋〕謂ふこと勿れ、今日學ばずして來日有り。謂ふこと勿れ今年學ばずして來年有り。日月逝きぬ、歳我と延びず。嗚呼老いたり、是誰の愆ぞ。

とあります。之は今日學ばぬでも、明日といふ日がある。今年學ばぬでも來年といふ年があるといふでない。日月の立つのは早いもので、忽ち年老いて仕まふが、自分の老いたるに、尻のやり所はない。とであります。又曰く

少年易レ老學難レ成。一寸光陰不レ可レ輕。未レ覺池塘春草夢。階前梧葉既秋聲。
〔釋〕少年老い易く學成り難し、一寸の光陰輕んずべからず、未だ覺めず池塘春草の

夢、階前の梧葉既に秋聲。

若い者も忽ち年を取りて、學問は中々出来ぬ。されば一寸の月日もおろそかにしてはならぬ。池のつゝみの草の上に寝ころびて、夢ばかりなる春の眠りのまだ醒めぬ中に、庭の桐の葉は散つて、最早秋となりました。かやうに年月は人を待たぬものであります。アナタ方は教育を受け、勉強してこの位の詩は讀める。愉快な事であります。之を暗誦するほどの親なれば子供を育つるのも容易であります。今春の花盛りの如き時に、勉強をなさい。而していつ何如なる時に、勉強すべきかとならば、古人は三餘讀書といはれました。

魏略に曰く、董遇字は季直、性質訥にして學を好む。人の從ひ學ぶ者あれば、遇教ふるを肯はずして曰く、必ず先づ讀むこと百遍すべし。言ふころは讀書百遍すれば義自ら見ゆと。從學者曰く、日なきを苦渴すと。遇曰く當に三餘を以てすべし。冬は年の餘。夜は日の餘。陰雨は時の餘なりと。

魏略といふ書物に、董遇と云ふ人に、從つて習はうと云ふ者があれば、中々承知せぬで書物を百遍も讀め、そうすれば意義も自づと分るものと申します。習はうと云ふ者がそれ丈の時がないと申しますと。三つの餘りで書物を讀みなさい。一年中春夏秋冬に精出しておけば、冬が餘り、日の中精出して夜を餘し、晴天の日によく働いて、雨の降る日を餘し、その餘りの時を利用して、書物を勉強せよと申すことであります。菜根譚に

子弟者大人之胚胎。秀才者士夫胚胎。此時若火力不到。陶鑄不純。他日涉世立朝。終難成三個令器。

〔譯〕子弟は大人之胚胎なり、秀才は士夫之胚胎なり、此時若し火力到らず、陶鑄純ならずれば、他日世を涉り朝に立つて、終に個の令器と成り難し。

青年子弟は、大人たるべきものゝ腹ごもりして居る卵で、秀才とは支那で役人の試験に及第したものゝことであるが、之は他日役人となるべきものゝ卵であります。それ故こ

の時の教育が若も大切で、きびしく訓練せねばならぬ。若この時に躰がきびしくなかつたならば、丁度金物を作るに火力が十分に透らず、陶鑄がゆきとゞかぬ様なもので、他日大人となつて世をわたり、役人になつた時、用に立つべき令器とはなることが六かしいといふことであります。今日の青年子弟も修養すべき時を忘れてはならぬ。御誓文中に『智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし』とも『舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし』とも、陛下は天地神明に誓はせられて仰せられました。教育に關する勅語にも『智能を啓發し徳器を成就し』と仰せられてあります。この智能をひらき、人格を鍛練するにも時があるので、若しも此の時を失へば、よい物にはなれませぬ。飯を炊くにも、菜を煮るにも火加減が大切で、御馳走をしても時があります如何に美味い御馳走でも、朝起立てに口の粘るときには美味くない、どんなよい材料を使つても、御客様が風呂に這入つて居るとき煮立て、は、豆腐も煮え頃を失つて堅くなり、飯も冷えて仕舞ふ様なものであります。嫁入りも時を失へば、良き所には行けぬ。何事も此の時を

失つてはなりませぬ。又曰く

春至時和。花尙鋪一段好色。鳥且嘯幾句好音。士君子幸列頭角。復遇温飽。不

思下立好言一行好事。雖是在世百年。恰似未生一日。

〔譯〕春至り時和らげば、花尙一段の好色を鋪き、鳥且幾句の好音を嘯す、士君子幸

に頭角を列ねて、復温飽に遇ひ、好言を立て、好事を行ふことを思はずんば、

これ世にあること百年なりと難も、恰も未だ生きざる一日に似たり。

春が来て、天氣も暖かく和らいで來ると、咲き匂ふ花さへ、一段の美しき色をまし、歌ひ戯れる鳥さへ、いくらか好き聲を出して鳴き嘯る、無情の花、無智の鳥さへも、時に逢へば此の如くであります。然るに紳士ともいはれ、幸に相當なる地位に立つて、頭を並べ、その上暖かに着て飽くまで食ひ、何不自由もなき身でありながら、世の爲になるべき、好い言を立てやうとも思はず、好い事を行はうとも思はぬならば、たとひ百年の間、此の世に生きながらへて居ても、恰も一日も此の世に生きて居らぬと同じことで何

の甲斐もないことで、社會一般より見れば、社會にないが増してあります。女は社會に立たざるも、男を生むのは女であります。偉い人を生むのも女であります。之は男で如何しても出來ぬことであります。男でも女でも夫々本分があるから、それを知つて時を失はず勉めねばなりません。本分とはたとへば飯椀は飯椀、汁椀は汁椀、坪、平、猪口と夫々盛るものが極まつて居る。これが本分で、汁椀に飯を盛つても、汁を皿に盛つても不可と同じく、女は子を生み一家を治むるが本分、男は外を務め一家を經營するが本分である、之を器相當に遺憾なく盡すのが大切であります。

渡邊華山先生の俳句

見よや春大地もどほす地虫さへ

此句は華山先生が、春の暖かな好時節に、虫のうごめくを見て作られた名句で、先生は幼にして家貧しくあつたが、常の人の氣の付かぬ所に目を付けられ、地虫でさへ時を得れば、此大地を通すことが出來得るのを見ると、何事でも時を得れば出來ざることは

ないといふ道理をさとられ、之が動機となつて、志を立てられたやうに聞いて居ります。今の人は時の來るを待たず、成功を急ぎます。又春夫といふ人の歌に、

咲かたゞあらん春かは中々に花にやさしの心いられや

春は花が咲くときまつて居て、咲かずにすむ春ではないのに、いらく思ふのは、ものはぬ花に向つて恥しい心であるといふのであります。今の成功を急ぎ、速成を望むものゝよき戒であります。又

一陽來復の時

といふことがあります。一陽來復の時とは、十一月を云ふので、一年十二月を陰陽に分ける時は、十一月に陽が發り四月に尽き、五月に陰が起り十月に盡き、又十一月に陽がおこります。十一月には木の葉が黄ばみ散りますが、此の時もはや來年の芽さす仕度をします。之が即ち一陽來復の時なので。此の如くして春夏秋冬の四つの時をなし、萬物を生ずるのであるから、如何にいらくしても、成るべき時でなければ成らぬ。時が來

れば機を失はず勉めさへすれば成功するものであります。徒に急いでも駄目であります。諺に
せいて嫁を貰つてゆるつと悔やむ。

ごあります、此道理は男でも女でも同じことでもあります。楠公の遺訓には次の如く云つてあります。

雖レ貧勿レ求ニ浮雲之富。難レ窮莫レ屈ニ丈夫之志。貧窮者士之常也。矯々如レ龍。耽々如レ虎。抱レ徳名レ隱。以潜レ身。當ニ待ニ一陽來復之時。若不レ逢レ時則獨善其身樂ニ天命。

〔譯〕貧すと雖ども浮雲の富を求むること勿れ、窮すといへども丈夫の志を屈すること勿れ、貧窮は士の常なり。矯々として龍の如く、耽々として虎の如く、徳を抱き名を隠し、以て身を潜め、當に一陽來復の時を待つべし、苦し時に逢はざるときは、則ち獨り善く其身天命を樂しむ。

いかに貧乏に苦しめばとて、働かず振袖して、浮いた金浮いた富を求めてはならぬ。精

出して働いて身を動せば、心に苦がありませんが、心苦しみますれば、身は動かぬでも衛生に害があります。働かさへすれば無理に求めずとも、貧に苦しむ様なことはない。若い時によく働いて、よき兒を育てよかかねばならぬ。楠公はいかに貧窮しても、益荒猛雄の志をまげてはならぬ。貧乏は當り前と思へ、進むときは竜が霧地に雲に走る心をもち、凝坐として居るときは、虎が人を射殺す如く、いかに自分は出来ても、之をかくして居り、金で名譽を買ふ如きことをせず。いかに徳を具へて居ても、偉い顔をせず、身を憐んでヒヨイ／＼せず。前に申した一陽來復の時を待ちなさい。若しも時に逢はねば、佛教にいほゆる因縁とあきらめの、自分一人天命なれば致し方なしと明らむべしとであります。之れ亦時についてのよき戒であります。

時に因んで、孝經に庶人の孝が説いてあります。一般に心得べきことと思ふ。
孝經 庶人章

子曰因天之時。就地之利。謹身節用。以養父母。此庶人之孝也。

〔譯〕子曰く、天の時に因り、地の利に就く、身を謹み、用を節にし、以て父母を養

ふ、此れ庶人の孝なり。

農工商と分れて居るけれども、其中で農が根元で、即ち農が第一位に居る。工商は農があつて、物を生産するから、其間に介在つて渡世するものである。庶人として一般人民は役人の如く、別に一定の俸給がないから、先づ各其職業を勉めて、糊口の道を立てねばならぬ。一般人民の中第一位に居る農民は、天の時即ち春は耕し、秋は收むると云ふ天理にしたがひ、夏は草ぎり、冬は來春の支度をすると云ふやうに、天の時に其仕事がよく合ふ様にせねばならぬ。地の利とは地から利益を收むるので、其利益を取り入るゝには、地を利用せねばならぬ。即ち乾燥の地を畠とし、濕地を田とし、山には木をうゑて利殖を計るなどが、地の利につくと云ふのであります。二宮先生は地の利用につき「天地の恵つみおく無尽藏、鋤ではり出せ鎌でかり取れ」といふ和歌を示されました。なほ天の時即ち四時行はれ百物成るので、春の彼岸には蒔藜草、葱、玉葱等を蒔けば、芽を

出して成長し、接穂挿木をしても時をばづさねばよくつくのであります。たとへば南天は寒明に其芽を切りてさしおけば必ずつきます。牡丹をつぐは十月の一日、蜜柑を接ぐには春の彼岸、満天星、檜葉、杉も入梅にさせば大概はつくもので、椿をさすは六月土用入三日目に枝を切てさせば、妙につくもので、この時に切られた椿は又妙に花が澤山つくものであります。又之に日に三度時をきめて水をやり、地の利に就かしめねばならぬ。此の如く凡て種蒔にも接穂、挿木にも、其性質の異なるにつれて、夫々其時がある。この天の時に因つて萬物も生ずるものであります。而して前に述べた様に、天の時により地の利について働けば、生活上衣食住には困らぬが、人間の價はそれで足れりといふものではない、勸語にも仰せらるゝ如く、恭儉己を持して身をつよしみ、又いかに有福だからとて、みだりに度を越え、財を散ずるに於ては、天の時地の利によつて取り入れた意に反するから、平生財用をひかえて、各自の分度を守る様にせねばならぬ。此の如くにして両親に孝行を尽したなら、自分も安全に両親も満足するものであります。而し

て両親を養ふにも時があります。徒に日を送つて親が亡くなつてから、孝行しやうとしても駄目である『子養はんと欲すれども親待たず』『孝行のしたい時には親はなし』であるから、働くべき時によく働き、用を節して身を慎み、吾身が恩徳の塊なることを知り常に報徳的に努力することを心がけ、時の尊きことを知りて時を大切にし、時を失はずしてよく勉め、天地の化育を賛成し、君父師等の恩に報いねばなりません。佛教に所謂知恩報徳といふも亦之に外ならぬこと、思ひます。終になほ、過去の時といふことに就いて、誕辰祝をなすべき理由を申しませう。吾々は生れた時を忘れぬ爲に誕辰祝をせねばなりません。なせなれば吾々が母の胎内にあつては、その臍の緒より母の成分を傳へて育てられ、此の世の中へ生れ出ては母の乳一滴が元で、この一滴が積りくつて今日の吾身となつた、その元の時を忘れてはならぬ。それから母は吾身を忘れて之を愛し、抱いたり負んだり心配に心配して育てた、恩徳のかたまりである。彼の鐵道の長さも土方の一荷が元である、此頃私は加賀の金澤の公園を見

ましたが、この公園はもと舊藩主前田侯の御園で、宏大、幽邃、人力、蒼古、水泉、眺望の六つの景勝を兼ねると云ふので、兼六公園と云ひますが、こんな立派な公園でも人の手一つから出来たものであります。何でもその本その始があるのであります。人間の物は親である。人間の始は生れた時である、勅語にも臣民に向つては始に父母に孝と仰せられてあります。孝經には『親に事ふるに始り、君に事ふるを中にし、身を立つるに終る』とあり。忠臣も孝子の門から出るので、忠孝が完備してこそ、身も立つのであります。然るに人は往々之をはき違へて居ります。何事でも乳一滴から割り出さねばならぬ。汽車に乗るには必ず停車場から乗り、かへるにも亦停車場から下りるのであります。誕生は即ち人間の停車場であります。世には誕生祝をするものがありますが、たゞ祝ひさへすればよいのではありませぬ。二條院讚岐といへる人は『今の世の人生れ日を喜び、祝ひまつるは大なるひが事なり、吾は此の日に涙を流し、母の千辛万苦を思ひて食事をも忘れて思ひくるしふにたえたり』といはれました。されば誕生當時両親がその

生れたを喜び、その成長を樂み、いかに千辛万苦せられたかを考へねばならぬ。世間によく『子を持つて知る親の恩』と申しますが、之は親の恩の有がたさを知つた時云ふのではなくて、子に持ちかね果てた時にいふことであります。親の苦勞が之で分ります。斯様な譯であるから、ただ生れた時を祝ふのみにあらず、之を忘れぬためにするのであります。吾々は謹んで天長節を祝し奉ると共に、自分の両親の生れた時、自分の生れた時を知らんでは、報本反始の大道にもそむく譯であります。

行末の榮え思はゞ人の爲めよからんことの數をつみてよ（橋千蔭の親の詠）

之を要するに誕生祝は身を慎しむべき日を思ふべしであります。

明治四十五年一月十四日印刷
明治四十五年一月十六日發行

愛知縣豐橋市大字西八五十三番戶

編輯兼發行者

田中周平

愛知縣豐橋市大字西八五十三番戶

印刷者

彦坂治三郎

豐橋市大手

發行所 三陽堂